

# 子供を理解せんとする母の努力

東京女子高等師範學校教授

石 川

謙

たゞ單に愛するばかりではいけない、子供の身體の構造や心のはたらきやの原則を實情を充分に理解していなければならぬ。こいふことは幼い子供を持つ母親への要求として、世の中の識者がよく繰返す言葉である。それに違ひはあるまい、そうあつて欲しいものだと思つてゐる。

然し子供の心と身體とを理解するこいふ意味が單に生理學的に或ひは心理學的に把握する、こいふ事だけの意味にとゞまるならば、それは「事實の追跡」であつて、決して子供養育の最後のものでもなく、最大のねうちあるものでもあるまい。一つの手段、一つの方法を提供して呉れる手掛り足懸りとしてのみ、それだけかのねうちを持ちうるにすぎぬであらう。

子供を知るこ云ふ事、養育するこ云ふ事は同じではない。聯らなつた事ではあらうが、つらなり方には種々ある。若しも知つたが故に常にそれに隨はなければならぬ、こいふのであつてみれば、其處には養育さか、教育さかいつた様な、大人の意志の積極的な働きかけはみこめられな

い事になる。知つたがゆゑに手も足も出なくなる。賢さが、臆病さを誘なつて何もしない事になるのは此のゆゑであらう。養育するさか、教育するさかこいふ事は、親たる人の本能的な、盲目的な、自働的なはたらきの内に、多分に根ざしてゐるものである。いひかへて見るに、親自らもしばく自覺して居ない所の母性愛・父性愛の愛情の變形である。愛せずにはいられぬ心、養育せずにはおられぬ心である。それ故に愛情がしばく盲目的であつて具案的でない様に、母親の養育・教育はこもすれば理性からはなれて、理性とは相容れない方向に落ち入りやすい。それはさう考へても養護學の上からも教育學の上からも、承認しえない愚しき悲劇である、判斷しなければならぬまい。

然しそれだからこいつて愛情的なものの本能的なものをぬぐひさる事は、それが不可能であるのみならず、しようとしてはならぬ企てである。さう考へて來るに、教育的のものの中に缺くこも今日の教育學からいつて非教育的なものが、宿命的に抱きこまれてゐるこみなければならぬ。合理

的に合理的に努力してゐるにも拘らず、到底整理しきれない非合理的なものが含まれてゐる事は、矛盾といへば矛盾であるが、我等の人生の壯嚴なる事實として、これをみこめなければなるまい。整理しようとしても、組織立てようとしても、破れて、綻びて、閃き出てくる非合理的なものを、一概に排斥してしまふ事は、安全にして且安價な科學主義である。人生の事實は科學主義によつて清算し得るものでない。隨つて教育の事實も又割切れない非合理的な事實が絶えず残されてゐる。残された非合理的な面の教育的表現として、しばしば無智といはれ無謀といはれる、教育の方法がわき出てくるのである。私は斷じて、殊更にそれを尊重しようとする程のあまのじやくではない。然しそうしたものを、一概に排斥し去る、甘い科學主義者にもなれない。親達が自己の全人生をかけて、その持てる愛情の故に合理的なものを求めると同時に、同じ愛情の故に非合理的なものを、養育・教育の仕事の全面に暴露してくる事實を、精練されない愚しさとして排斥し嘲笑する氣持にはなれない。むしろ所謂愚しさの中にこそ、本當の母親らしさが尊く閃いてゐる事實を眺めては、涙ぐましい感じに打たれて、感謝したいさへ思ふ場合がある。

世の中の幼い子供の母親たちに、聰明な科學者として子供に臨んでもらふよりは、むしろ科學によつて枉げられた

り、抑へつけられたり、傷つけられたりする事のない、<sup>うぶ</sup>初心の氣持としての愛情が飾り氣なく子供の上にふり注がれる愚かしい瞬間の母親をこそ母親の純なる姿として、眺めたいと思ふ。百パーセント科學者になりきつた賢い母親からは、恐らく純真な溫い子供の魂は生育しないであらう。況んや出來合の心理學や教育學から安價に仕入れた知識や法則を、無暗に有難がる錯覺から編みだされた死骸ばかりの方法論で、一體如何なる子供が育てあげ得るものであらうか。子供を愛すればこそ科學を尊ぶ、子供を愛すればこそ科學からそれて行くと言つたやうな絶えざる矛盾の中にこそ、子供の本當の成長が望まれるであらう。少くも魂の素直なそして溫かな成長が、科學的に科學的に努力しながら、しかも絶えず非科學的な盲目的な愛情の迸りによつて、いつもいつも破れ傷つく母親の魂に努力の中にこそ成長を遂げるものであらう。

世の母親たちが幼兒の健かにしてすなほ、<sup>い</sup>生育を望むならば、母親自體が子供に對して自然に持つてゐる純真さ、熱烈な愛情さを、そしてその故に表はれ勝な破綻さを見掛け美しい科學の前に、恥ぢてはならない。決して科學的なものを排斥したり軽く見たりしようとする意味に於いては、<sup>い</sup>はないが……。